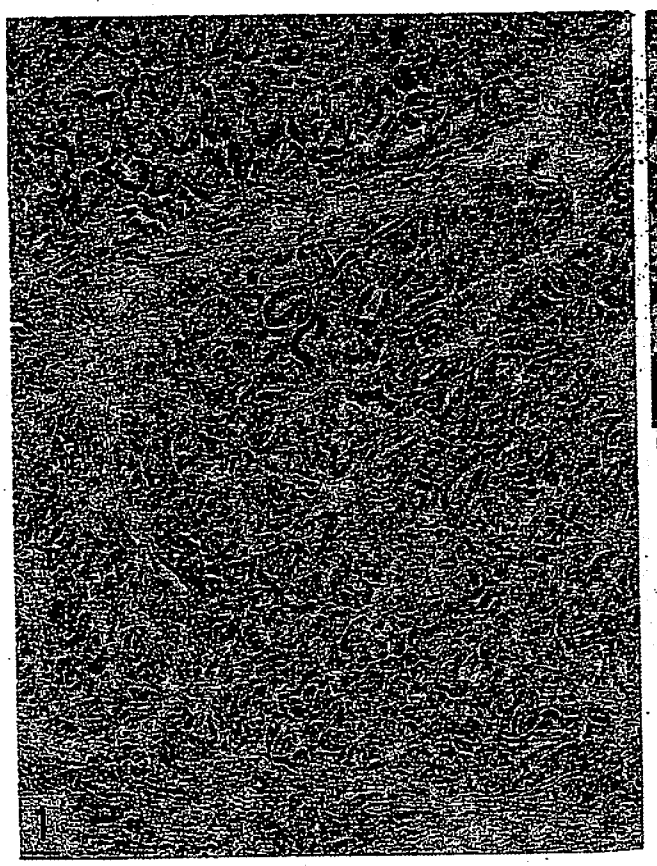
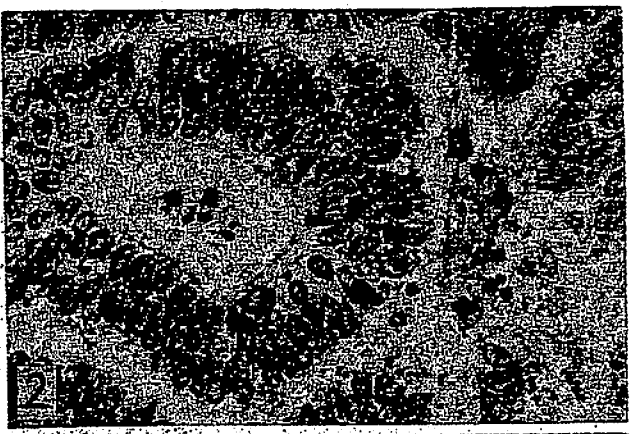
牛の内臓漿膜に汎発した腺癌

農林省家畜衛生試験場病原病理研究室出題　第14回獣医病理学研修会標本 No.200





症例は山形市内で飼育されていた8才，雌のホルスタイン種で，分娩してから1か月半後に第4胃左方変位と診断された。開腹治療をしようとしたところ腹壁および胃漿膜に腫瘤の多発が見いだされ，真珠病の疑いで殺処分された。

肉眼的所見：腫瘤は大豆大ないし拇指頭大で比較的弾管腔内にはしばしば粘液物質あるいは脱落変性細胞を容れていた。またこのような組織は厚い結合織で囲繞される傾向がうかがえた(写真3)。腫瘍組織は肉眼所見で明らかなように漿膜に限局して形成されていることが多かった。しかし肝ではグリソン鞘に一致する部分あるいは該部から実質に向かって同様な腫瘍組織が認められ，肺においても間質に限局性腫瘍細胞巣が存在した。さらに肺門リンパ節あるいは腸間膜リンパ節でも包膜が線維性に肥厚し同様の腫瘍病巣が形成され皮質に一致する部分がこの腫瘍組織で置換されていた。臓器に分布するリンパ管にはしばしば腫瘍細胞が栓塞しており腫瘍の転移はリンパ行性と考えられた。そのほか子宮では被膜化された腫瘍組織の近くの漿膜面に一層の子宮内膜上皮細胞に類似した細胞が限局性に認められた(写真3)。また腫瘍力を有し灰黄色を呈していた。それらは第3胃，子宮，膀胱の漿膜に密在するとともに肝の包膜と実質表層，脾の包膜および肺辺縁の実質にも認められた。

組織学的所見：腫瘤では，比較的大型の核と広く明るい胞体を有する円柱上皮細胞が重層し管状複合腺様構造を呈して腫瘍性増殖を示した(写真1，2)。腺腔および組織にはヒアルロン酸は証明しえなかった。

肉眼的に腫瘍は主として腹壁腹膜および腹腔内諸臓器の漿膜に播種性に形成されておりその分布の特徴は中皮腫(Mesothelioma) あるいは外子宮内膜症(Endometriosis externa)のそれに類似している。しかし組織学的には中皮腫の特徴はなく，またヒアルロン酸を欠くことおよび年令などから中皮腫とは考え難い。子宮漿膜上に部分的に認められた子宮内膜様細胞の存在，腫瘍塊が結合織で被膜化されていること，およびリンパ行性転移がうかがえたことを考慮すると，外子宮内膜症の可能性も考えられないこともない。しかし本症例は組織学的に著明な腺腔ないしは管腔形成を特徴とする腫瘍であり原発不明ではあるが腺癌とその転移病変とみなすのが妥当と考えられた。